

勤務交代

部隊が漢口の停車場へ降りたのは、一月廿六日の夜九時近くであつた。私達は此處で久し振りに驛の事務室に輝いてゐる電燈の光を見た。部隊の第二半部が、前の年の十一月から既に病院を開いてゐる建物まで、私達は「トラック」に分乗して行つた。

夜の漢口の街は薄暗かつたが、夜空に聳えてゐる兩側の高い建物の窓からは明るい灯が洩れてゐた。街の辻々には歩硝の銃剣が光つてゐた。人通りは稀であつた。先きへ行く車が街角で、

「誰か？」

と誰何された。

「佐々木部隊」

と答へて通り過ぎて行つた。

部隊の病院は街の西端にあつた。

これは「中國地方法院」といふ元の支那の裁判所兼刑務所であつた。

表の鐵の門を入つて行くと、正面に石の階段があつて其處に庶務室、經理室、藥劑部等が並んでゐた。裏手には幾つもの廊下があつて細い部屋が澤山あつた。皆んな病室や部隊員の部屋に應用されてあつた。裏庭の向うの幾棟かは、刑務所の監房に使つたらしい小さい部屋が、廊下の兩側に幾つも並んでゐて、廊下の所々は頑丈な背の高い鐵の柵によつて仕切られてあつた。

此處は全部「傳染病棟」になつてゐた。

表も裏も全部二階建てで、表の二階には隊長と各軍醫の部屋があつた。地下室があつて此處には經理室の倉庫と治療室などがあつた。私は此處へ着いた夜、經理の事務室の隣りへ、辻主計や青木軍曹や梶谷上等兵や森永上等兵と寢臺を並べて休んだ。

白い壁に明るい電燈、そして暖い暖爐に私は南京での生活を再び味はふ様な氣がした。青木軍曹と森永上等兵は、

「俺達が去年十一月此處へ來た時には、まだすぐそこから毎日銃聲が聞えてゐたし、電燈は點かなかつたし、とてもひどかつたよ。

此の頃ちや街も日に／＼繁華になつてゐる。まア明日は、ゆつくり見物して來いよ」

と言つた。

翌日、森永が私の顔をつくつく眺め乍ら、

「俺は昨夜見た時からさう思つてゐたんだが、貴様、蚌埠に一緒にゐた時とは減法肥つたなア、豚の喰べ役ばかりしてゐたんだらう」

と言つた。私は笑ひ乍ら「馬鹿、そいつあお前のお母さんに言ふことだ」と言つたが、肥つたことは異議なく認めた。

私達二三人は青木軍曹と森永の案内で街へ出た。お天氣の良い故いか「信陽」とは暖い様であつた。出がけに私が外套を着て行かうとすると森永が、

「信陽なんかの田舎とは違ふぞ、外套なんか要るかい」と言つた程であつた。

昨夜見た黒い影の様な高い建物が、今日は白日の下に復興「漢口」を物語つてゐた。堂々とした日本人商店が軒を並べてゐた。

洋車が何臺も列をなして走つてゐた。

日本の兵隊と、日本人と、キモノを着た日本の女と、支那人とが街幅を一ぱいに歩いてゐた。皮

細工、煙草、懐中電燈、錠前等の支那人の露店が街の兩側にすらりと並んでゐた。

街角の家の壁が白く塗り替られて「仁丹」や「ライオン齒磨」や支那たばこの廣告の美人の繪などが、家の大きさ一ぱいに書いてあつた。そのペンキ塗の下に、排日抗日の文句が幽に残つてゐた。日本人の飲食店が一番澤山眼についた。

店先に美味さうな「すし」や「丼」が並べてあつた。暖簾の蔭から姑娘が覗いてゐた。

私達は外國租界の方へ歩いて行つた。

日本人の街と外國租界の境には、日本の歩哨が着剣銃を持つて嚴然と立つてゐて、通行人の一人一人について携帶品等を調べてゐた。

私達は敬禮をして其處を通り抜け、外國租界を左手に眺めて楊子江沿岸の廣い通りを歩いて行つた。赤い煉瓦を圍らした綺麗な洋館が並んでゐた。三階の硝子窓の縁に赤い色の花が咲いてゐた。

三角に尖つた様な屋根の上には、「イギリス」や「フランス」の國旗が立つてゐた。だぶ／＼のズボンを穿いた脊の高い外國の水兵が二人連れで歩いてゐた。

租界の入口には頑丈な木の柵があつて、その内側に外國兵の歩哨が立つてゐた。日本兵は此處へ入つては不可ないとの事であつた。

木柵の向うには外國人が澤山歩いてゐた。

その中に混つて、街では餘り見受けることの出来ない綺麗な服装をした支那人が悠々と歩いてゐた。

事變が始まつて漢口が戦火の巷になると、金持の支那人は此處を安易な避難所として逃げ込んで來たのであらう。

外國の旗の蔭に隠れて、木柵の中での生活に、何等の耻辱をも感じてゐない様な彼等の姿を、私は情ない奴だと思つて見た。

楊子江の棧橋には大小幾多の汽船が碇泊してゐて、大勢の苦力が米俵の様な物を擔いで陸揚げしてゐた。監視の日本兵が銃を持つて其の中に立つてゐた。

河の浅瀬に、胴體にイギリスの國旗が書いてある客船が一隻、捨てられた様に浮いてゐた。

私達は元の道へ引き返して、とある大きな食堂へ入つた。どのテーブルも兵隊で一ぱいであつた。日本の若い綺麗な女が、其の間を泳ぐ様な格好で喰べ物を運んでゐた。

何の兵隊も皆んな美味さうに喰べてゐた。私は其處で上海以來喰べる事の出来なかつた天ぷらを腹一ぱい詰め込んだ。

私は、此の大勢の兵隊に混つて「すし」を喰べてゐる〇〇兵伍長佐野周二の軍服姿を發見した。

彼が此の中支の戦線へ來てゐる事は豫て噂で知つてゐたが、實物を見るのはこれが初めてであつた。銀幕の花形も、今は既に立派な戦線の兵隊になつてゐた。

笑顔のいゝ女が私の傍へ來て、酌をして呉れた。外へ出てから青木軍曹は、「あの娘の笑顔は驢馬に似てゐる」と因縁をつけた。

ちえツ、驢馬なら驢馬でいゝ。驢馬にして置くがいゝ。

二月の終り頃、佐々木隊長に内地歸還の命令が來て、其の後任に現地から藤本軍醫少佐が着任された。

部隊は茲でまた「藤本部隊」と名前が變つたのであつた。

それから間もなく、部隊の第二半部は、漢水を遡つて〇〇へ前進して行つた。私達第一半部は其の儘残つて、病院業務を續けてゐた。

漢口は四月に入ると、急に氣温が高くなつて來て、病院の裏の一面の荒野には、いつの間にか夏草が茂つてゐた。

此處では南京の様に楊柳に新芽が吹く長閑な春が無くて、冬から一足飛びに夏が来てしまひさうであつた。

さうして支那は何處でもがさうである様に、蠅と蚊が日増しに多くなつて來た。蒼空に浮んでゐる白い雲も、最早夏の姿をしてゐた。

私達は斯うして、蚌埠以來、二度目の早い夏を大陸に迎へた。

そして四月下旬、上陸以來何度目かの勤務交代の命令が出て、私は經理室から傳染病室へ行く事になつた。

私の仕事の一つであつた「ニュース」の發行も、「オハラニュース」から「さゝきニュース」と名前が變り、今度また新しく「フヂモトニュース」の名によつて發行して行くべきではあつたが病室勤務ではそれは困難だと思はれた。信陽で出した第三十七號を最後として私はこれで机の上の仕事から一切手を引いて白い作業服を着た本當の野戰病院の兵隊になつたのであつた。

一年餘りの經理室勤務を離れる事に尠なからざる名残はあつたが、大便と消毒薬と注射との傳染病室へ行く事に、私は衛生兵らしい誇りと、興奮と、そして或る野心をさへ覺えて、深緑の章がやつと自分の物になつた様な氣がした。

背囊と私物の風呂敷包みを持つて部屋を出て行かうとする私に、辻主計は、

「君、充分氣を付けてやつてくれよ」

と言はれたが、私は自信をもつて、

「はい、主計殿、大丈夫であります」

と答へた。

傳染病室勤務

五月〇日

私が本部の裏手にある傳染病棟の一つ、「佐々木隊」の事務室へ行つて挨拶をすると、專任の佐々木軍醫少尉が、

「あゝ御苦勞、まあ、しつかりやつて貰ひたい。此の病室勤務も仲々面白いよ。併し、慣れて來ると、つい油斷をして、不覺の感染を見る事があるから、其の點はいつも緊張してやつて欲しいね」と言はれた。

私は飽きる程聞かされた傳染病患者取扱の事項を、頭の中に思ひ浮べながら、「はう」

と答へて、ひとまづ當てがはれた兵隊の部屋へ入つて私物の整理などをした。

此の病棟は、支那の刑務所の監房を其の儘利用したもので、「コンクリート」の廊下の兩側に、小さい部屋が幾つも並んでゐて、一番端が事務室で其の他は全部病室になつてゐた。

二階にも同じ様な病室があつて、私達兵隊の部屋は一番端に向き合つて二つあつた。すぐ傍の、廊下の隅の窓の下には、青い野原が展けてゐた。

二階は、病室も私達の部屋も皆んな懐しい疊が敷いてあつた。八疊敷位の廣さであつた。階下は全部寢臺で、主に重症患者が收容してあつて、之が恢復期に入ると階上へ轉居するといふ事になつてゐた。

x

石田與作上等兵と、水元上等兵と私の三人が、一つの部屋へ枕を並べて寝る事になつた。疊の上へ毛布を敷いて横になると二つの窓硝子から隣の病棟の瓦屋根が少し覗いてゐた。窓の外側に取付

けてある頑丈な鐵格子と、顔がやつと見える位の小さい窓のある入口の分厚い扉とが、監房であつた事の名残りを留めてゐた。そして大分汚れてゐる部屋の白い壁に囚人が悶々の情を訴へたらしい斯んな落書がしてあつた。

我青天白日到監禁

須知已無罪到監禁

噫無情何日我自由

五月〇日

私は事務室の壁にかけてある白い作業衣を、上陸以來初めて身に着けた。

それは私が經理室にゐた時、垣間見てゐた病室の兵隊の「武裝」であつた。

私は今日から此の姿で何んな患者の傍へでも勇敢に接近して行かうとしてゐる。

私は極めて細心で、而も大膽な病室の兵隊であらねばならぬ。

私以外の五人の兵隊は、皆んな上陸以來の病室勤務の経験者であつたから、私は當分見習ひといふ態であつた。

此の病棟に、前から専属の苦力が三人ゐた。彼等の仕事は主として病室の掃除であつた。傳染病室の仕事は午前中が特に忙しい。

私達の日課は大體次の通りであつた。

一、午前六時起床、階下の廊下で各病棟毎に點呼

一、午前七時朝食

二、朝食後直ちに作業開始

1、滅菌槽で注射器を消毒して置くこと。

2、體温、脈搏を診て檢温表に記入すること。

3、大小便その他の排泄物を始末すること。

4、病衣、毛布等の汚れ物を更新すること。

5、氷枕、氷嚢の氷を取換へること。

6、藥物整頓棚を見て揃つてない物は藥劑部で受領して來ること。

7、前日の軍醫の診斷に基く「處置表」に依つて患者の一人々々について注射其他の一般處置をなすこと。

8、毎食事を患者に分配すること。

此の一般處置は朝から始めても、大てい午後三時頃までかゝつた。

そして此の間に晝食を済ませて午後六時夕食、七時に又點呼があつて、九時に消燈喇叭が鳴るといふのが病棟大體の日課であつた。

併し消燈喇叭が鳴つても、どの病棟も消燈をしたり、直ぐ寝たりすることはなかつた。

それは不意に入院患者があつたり患者の一人々々について色々用事があつたりして、結局私達が衣服の消毒をして自分の部屋へ歸るのは大てい十一時前後になつた。

特に注意を要する重症患者がある場合には、不寝番が交代で二人づつ勤務する事になつてゐた。

私は斯うした日課の中で取り敢へず體温を診る事から始めた。それは病室に馴れ、患者の顔と名前とを覚えるためには一番手つ取り早い階梯であると思つたからであつた。

五月〇日

各病室の窓硝子と入口の扉が取外されて、蠅と蚊を防ぐために建築班が網戸を取付けて呉れた。患者は大てい「腸チフス」であつた。一つの部屋に三四人づつ入つてゐた。

階下の六號室だけは一人であつた。入口に、

「流行性脳炎、消毒を特に嚴重にすべし」と張紙がしてあつた。

私達は其の部屋へは特に「マスク」をして出入りした。

〇〇上等兵の其の患者は、首筋を硬直させて苦しんでゐたが、意識は殆んど混沌としてゐるらしかつた。私達が此の病棟へ来る大分前から入院してゐるとの事であつたが、今は全く絶望で最早死期が迫つてゐた。

二日前から不寝番が附いてゐた。

今日も診断の時、私は軍醫の後について部屋へ入つて見たが、變な聲を立て、何か判らぬ事を言つてゐる患者の胸に聴診器を當て乍ら軍醫は、困惑した表情であつた。傍に病床日誌を持つて立つてゐる栗原班長に、

「氣を付けてくれ給へ、今夜も不寝番を立て」と言つた。

五月〇日

「腸チフス」の患者は入院後三週間も経つて、熱が下りにかゝると、決つた様に旺盛な食欲を訴へてもう普通の御飯にして下さいと言つた。

軍醫に話すると、まだ早い、もう少しばらく粥で辛抱させて置かねば駄目だといふ。患者に言ふと「もう大丈夫ですよ。今朝は熱も無かつたし、大便だつて、見て下さい此の通り調子が良いんです」と言つて寢臺の下から便器を、自分で手を伸して引張り出して来る。

私達が此の時、兵隊同志の私情に負けたり、一片の仁義を立てたりすると、思ひもかけぬ不幸の轉歸を見るのであつた。

事務室の直ぐ隣の九號室にゐる木下一等兵は、これも「腸チフス」で、もう恢復期に入つてゐるがまだ當分は粥食の部である。

耳漏があつて、相當大きい聲を出しても聴えないらしい。此の兵隊にはいつも筆談ですることになつてゐた。

今日も晝めし時、例に依つて粥の入つてゐる食器を持つて行つたら、

「衛生兵さん、お願いですから並食にして下さい」と嘆願された。

私は用意してゐた紙片に、

「いま並食にしたら君は死んでしまふ。もうしばらくだから辛抱してくれんか」

と書いて見せた。

彼は寢臺の上へ起き上つて、食器とその紙片とを見てゐたが、

「分りました。並食は當分諦めます」

と淋しさうに言つた。

夕食少し前に六號室の兵隊は死んで行つた。

私達は屍體の病衣を軍服に着換へさせ、靴も履かせて、戦帽も被せた。これは戦地の病院での定

まりであつた。高木上等兵と水元上等兵が擔架に載せて火葬場の方へ持つて行かうとしてゐると、

事務室から石田與作上等兵が何か、小包の様な物一つ持つて來て、

「こんな物が來てゐるんだが何うしようか」と言つた。私達が、

「何んだ〜」

と言ひ乍ら手に取つて見ると、それは今死んだ此の兵隊へ、郷里から來た慰問袋らしい物一通の手紙であつた。差出人が女名前であるところから察して、妻か、母が送つて來たものであらう。

石田が、

「一昨日本部から持つて來たんだが、本人に言つても判らんらしかつたから保管して置いたんだが

……」

と皆んなに其の處置を相談する様に言つた。

私達はしばらく黙つてゐた。

規則として斯んな場合には、他の遺留品と一緒に本人の留守宅へ送り届けるのが本當であつた。

併し私達は是れを此の儘、兵隊と一しよに火葬にする事にした。さうするのが一番いゝと思つた。

石田が屍體にかけてある毛布を捲つて、その小包と手紙をそつと胸の上へ載せた。

蚊が増えて來たので今夜から各室とも蚊帳を吊る事にした。

五月〇日

とても暑苦しくなつて來た。

私達は私物の薄い「シャツ」の上へ、作業衣を着て仕事をした。

午前中「腸チフス」の疑似三名入院。

三名とも駐屯してゐる部隊の兵隊で、戦友に連れられて歩いて来たが、三人とも一緒に階下の病室へ入れて、病衣に着換へて寝かせると、顔から胸へかけてびつしより汗をかいて、唇はひどく乾いてゐた。

附添うて来た二三名の戦友が、持つて来た患者の背囊や私物の包を、それぞれの枕元へ置いて、

「おい、大事にしるよ、早く戻つて来いよ」

と言ひ乍ら病室を出て行つた。

三人は寝たまゝで出口の方へ眼を向けて、

「濟まん、濟まん」

と言つてゐた。

私共が其の戦友の後について行つて病棟の出口の所で噴霧器で消毒薬をかけてやつたら、

「どうもお世話をかけます。あの兵隊達に若し變つた事がありましたら此處へ電話で連絡して下さい」

51

と言つて、紙片に電話番号と部隊名とを書いて置いて行つた。

軍醫が来て、診察した。

水元上等兵が三人の血液と小便を採つて、病理試験室へ持つて行つた。其の成績を見なければ病名は決定しないのであるが、軍醫は、

「多分チフスだらう」

と言つた。取りあへず二人には〇〇〇靜脈注射を、一人には「リンゲル」の皮下注射をすることになつた。軍醫が私に、

「君はリンゲルをやつてくれ。分量は、さうだね、二、〇〇〇ccでいゝだらう」

と言つた。

私が「リンゲル氏液」の「アンブル」と、注射針の附いた「ゴム管」を持つて病室へ入つて行くと、水元と石田とは、兩端の兵隊に靜注をしてゐるところであつた。眞中の兵隊は、一寸頭を上げて私の方を眺めたが、すぐにまた濡れた氷枕へ頭を埋める様にして眼をつむつた。

私は壁に何本か打つてある適當な高さの釘に「アンブル」を吊るして、兵隊の右足大腿部の内側を酒精綿でよく拭いてから、太い注射針を手早く突刺した。太腿の筋肉がびりびりつと痙攣した。私は熱い蒸しタオルを持つて来て其處を罨法し乍ら、

「痛くないか」

と訊くと、兵隊はしは噎れた聲で眼を閉ぢたまふ、
「痛くないです」

と言つた。

夜の點呼が済んでから、いつもの様に交代で別棟へ入浴に行つた。

私は浴槽に浸りながら、昇永水で此の頃黒く變色して來た自分の手の爪先を眺めて、私もこれで少しは衛生兵らしくなつと思つて嬉しかつた。

夕方まではとても忙しかつたが、不寝番は今のところ無いし今夜は早く休めた。十時頃に隣の赤痢病棟の長原上等兵がシャツとサル又で、

「とても暑くて眠れんわい」

と言ひ乍ら蚊帳を捲つて入つて來て、私が寢轉んでゐる枕元へ、どつしりとあぐらをかいた。

長原は郷里では私の家とすぐ近所であつたし、こちらへ來てからも氣の合ふ仲のいゝ戰友の一人であつた。私とは二つ三つ若いのが、無精鬚を生やした頑丈さうな顔附は立派な兵隊面であつた。

私は読んでゐた雑誌を横へ伏せて、

「さうだ、暑くなつたなア、何か美味しい物でも持つて來たのかい」

と寢轉んだ儘で言ふと彼は、

「冗談言ふない、こつちが欲しいところだ。冷たいお茶を一杯くれんか」

と言ふから私は、筋向ひの部屋（私達の食堂）にあるから飲んで行けと言つた。

石田上等兵は手紙を書いてゐる。

水元上等兵は、此の間私が教へてやつた歌謡曲の「波止場氣質」を小聲で練習してゐる。

水元は唄好きな男である。

私は腹這ひになつて長原と、故郷の話、お互ひの患者の話、此處では口に出來ぬ山葵の利いた握りずしの話、等をした。

長原は歸り際に蚊帳の外へ出てから、

「今度都合のいゝ外出日に一緒に出ようか」

と言つたから私は、

「うん、行かう。鬚を剃つて置けよ」

と言ふと、

「この鬚か、これを剃る時は故郷の女房に一寸相談してからでないとなア、此の間の手紙に、貴方

は矢張りたわいの様な鬚が生えてるんでせう。頼母しいわね……と書いてあつたぞ」
と吐かした。

私は、

「惚氣るない」

と言つて仰向になると、彼、愉快さうに笑ひ乍ら出て行つた。

五月〇〇日

今日から一週間、中支派遣軍の〇〇〇部が主催で、一般民衆に公開の「衛生展覽會」が開かれて漢口に在る各衛生部隊からは係員が出て、説明等をする事になつた。

私達の部隊からは、西梨子上等兵と私と、齋藤軍曹、佐々木軍醫の四人に命令が出た。

会場は、私達の部隊から東へ真すぐに十町ばかり行つて、繁華な江漢路の通りを左へ一寸入つた「軍人ホーム」であつた。毎日午前九時から午後四時迄で、私は西梨子と二人で洋車を走らせて、会場へ行つた。彼と一緒に洋車を出て洋車を拾ふ時は私の方が歩が悪い。彼は私とは小柄のくせに鐘馗様の様なアゴ鬚を生やしてゐて、而かも上等兵の襟章がその鬚に蔽れてゐるので、腰の帶剣と、卷脚

絆の足許にさへ眼を着けずに置けば、一見將校の風格がある。

病室で白い作業衣を着けてゐたりすると、患者が特別吟味した敬禮をしたり、夜などは歩哨が捧げ銃をした事もあるといふインチキ性の前科を有する鬚である。

今日も私と二人、部隊の正門から表の通りへ出ると、例によつて客待顔で待機してゐた洋車の苦力が四方から集つて来て、洋車に乗つてくれといふのであるが、私には、

「先生、洋車、要、不要」

と言ふし、西梨子には、

「大人、洋車、要、不要」

と言ふ。

「先生」と「大人」では尠くとも平社員と重役ぐらゐの格式が違ふ。鬚が物を言ふのである。

而かも同じ十錢でありながら、西梨子の前へは綺麗な洋車が握棒を下ろす。

いざ走り出すとなると彼の車が先頭になつて行く。苦力の奴、私を従卒か隨行ぐらゐに思つてゐるらしい。これは別に今日に限つたことではなく、一週に二度の外出日に偶々彼と一緒に出た時にも経験させられてゐる香んばしくない現象である。

今日は會場の前へ着いた時、私は「細いのが無いから」と言つて西梨子に洋車代を支拂はせて、僅かに日頃の宿怨を晴らした。

「軍人ホーム」は三階建て、一階が兵隊の雑誌新聞等の閲覧室、二階が食堂、廣間の三階が娛樂室になつてゐて展覽會はその三階の廣間であつた。

出品物は、漢口と武昌に在る衛生部隊が夫々得意の資料を持ち寄つたもので、主に花柳病、マラリア、結核、蛔蟲等に關する標本や「ポスター」等が會場一ぱいに陳列してあつた。

西梨子と私とは、私達の部隊から出品した「腸チフス」「コレラ」「赤痢」の傳染経路や症状等を現はした「ポスター」と、「腸チフス」の腹部内臓を「アルコール」詰にした標本に就いて參觀者に説明するのが役目であつた。

他の部隊からも夫々係りの兵隊が来てゐた。

時間が来ると、兵隊と在留日本人とがどやどやとやつて来た。

西梨子と私とは交代で椅子の上に乗つて、細い棒を持つて説明をした。

「コレラの症状は、腹が痛まらずして劇しい下痢嘔吐によつて始まり、見る／＼裡に元氣がなくなつて眼は窪み、鼻は尖り、皮膚の弾力は無くなつて……」

實に我れ乍らの名調子であつた。軍服の上に白い作業衣を着てゐる私を、何處かの若い軍醫とも思つたらしく、男も女も兵隊も皆んな感心さうに聞いてゐた。ひと通り説明が終ると、次の人溜りを待つて又前の通りに繰返してゐればいゝのである。

私の前で熱心に聞いてゐた若い砲兵の中尉が、私の説明が終ると、

「どうも有難う」

と言ひ乍ら擧手の敬禮をされたので、私は慌て、椅子から飛び下りると、帽子を被つてゐないのも忘れて、

「はいッ」

と擧手の敬禮をしてしまつた。

六月〇日

三月中旬〇〇の戦線へ前進してゐた部隊の第二半部が一日昨日歸つて来たので、また勤務交代が行はれて、私達の病棟では佐々木軍醫、栗原伍長、酒井伍長、水元上等兵の四名が轉勤となり、その代りに専任軍醫として〇〇から歸隊早々の門野軍醫少尉、班長としては藥劑部から大谷軍曹、治療

部から小島伍長、それに門野軍醫等と一しよに〇〇から歸つて來た山本上等兵が私達のメンバーに加はつて、今日から私達の病棟の名前が「門野隊病棟」と變つた。

門野少尉は去年の夏、蚌埠にゐた時の「コレラ」病室の専任軍醫であつた。山本上等兵は私達の部屋で寝ることになつた。

轉勤になつた水元上等兵は私物等を持つて「また、ちよいと遊びに来るからいゝ唄があつたら教へてくれよ」

と言ひ乍ら部屋を出て行つたが其の後に、忘れて行つたらしい彼の寝てゐた枕元の壁に、いつか私我便箋に書いてやつた「波止場氣質」の唄の文句が、「ピン」で押へたまゝに残されてあつた。

門野軍醫は事務室で私達一同に、

「今日から諸君らと一緒に働かう。諸君らは僕と一緒に仕事をすると、いつも損ばかりしてゐて少しもいゝ事はないだらうと思ふが、とに角皆さんで此の病棟をうまくやつて行かう」

と言はれた。

六月〇日

昨夜、寢床へ入つてから石田と山本と私の三人が「かう暑くなつては、とてもやり切れんから」と相談し合つた事を、今朝少し早目に起きて實行にかゝつた。

それは私達の部屋の横の壁を突き破つて、風通しの穴を明けるといふ事であつた。苦力にも手傳はせて、どうやら一尺四方位の穴が明いた。首を出すと、緑の野原の向うに難民區のごみくし家並が見えた。何事にもよく氣の附く石田が、

「これちや蠅と蚊の木戸御免だ」

と言つて何處からか蚊帳の切れ端を持つて來て、穴の所へ釘で打ち付けた。

これで今夜から少しは暑さが凌げるだらう。

昨日、また三名の入院があつて、病室は皆んな一ぱいになつてしまつたが、今日は二階の患者で四名の原隊復歸が出來たので、また少し餘裕があつた。

原隊復歸の兵隊は久し振りに着た軍服姿も嬉しさに、つい先刻まで病室にゐて白い病衣を着てゐた時とは打つて變つた様に元氣のいゝ兵隊になつてゐた。

軍醫や班長に、

「陸軍歩兵上等兵〇〇〇〇外三名は本日朝食後、原隊復歸を命ぜられました。謹んで申告いたしま

す」

と挨拶をして、私達にも口々に、

「お世話をかけました、有難う御座いました」

と言ひ乍ら出て行つた。

私達はいつもの様に病棟の出口の所まで見送つて行つた。

彼等は本部の建物の曲り角で又立ち停つてこつちを向いて敬禮をして行つた。

あの兵隊達は戦線から病院へ、そしていま又戦線への再出發である。

私はあの兵隊達が、今後どんな酷暑の苦熱や殺戮の戦場に身を曝す事があらうとも、二度と再び

こんな病院へ入る事のない様にと祈らずには居られなかつた。

午後から交代で外出をした。

私は身仕度をして隣の病棟へ長原上等兵を誘ひに行くと、彼は病室から注射器を持つて出て来て、

「お、俺も今済んだところだ、一緒に行かう」

と言つて外出の用意にかゝつた。

例の鬚は綺麗に剃つてあつたから私は、

「おい剃つたなア」

と言ふと、

「フフン、矢張りなア」

と言ひ乍ら顎を撫で廻した。

外へ出てから道々、彼は今俺達の病棟は「赤痢」が多いので忙しいと言つてゐた。私達は江漢路の或る食堂へ入ると直ぐに上衣を脱いでビールを飲んだ。黒い支那服の斷髪の姑娘がサーピスをしてくれた。

午後四時頃、陽の照りつけるアスファルトの道を汗を拭き乍ら歸つて來ると、二號室の前の廊下に擔架が二つ置いてあつた。

私は「また入院だなア」と思ひ乍ら、事務室で服を着換へてゐると、石田上等兵が「リングル」を取りに来て、

「コレラ二名だ」

と言つた。

患者は二人とも軍屬で〇〇の船員であつた。

二號室に寢臺を並べて寝かせてあつた。

二人とも體格のいゝ中年の男であつたが、顔は流石にげつそりと衰れて「コレラ」特有の表情であつた。目をつむつて苦しさに呼吸してゐた。軍醫は「リングゲル」の靜脈注射をしてゐた。

時々、顔を横に向けて薄い牛乳の様なものを吐いた。弾力を失つた皮膚の所々に、象の腹の様な皺が出来てゐた。

二人ともに「リングゲル」が何本も注射された。

しばらく経つて軍醫は血壓を調べて、

「もう後、一本でいゝだらう」

と言つた。

事務室へ戻つてから軍醫は私達に、

「二人とも大丈夫だが今日と、明日は特に氣を付けて欲しい。君達はコレラを決して懼れては不可んよ。尤も消毒には充分氣を付けなければならぬが、コレラは死ぬ者は初めの裡にあつさり死んで了ふし、治る見込のある者ほとんど早く治つて行くつまり傳染病の中でも最も男性的な奴だよ」と言はれた。

それにしても此の大陸で最早「コレラ」が流行出して來たのであらうか。

六月〇〇日

漢口の各部隊とも全部當分の中、公用以外の外出禁止となつた。難民區に支那人の「コレラ」患者が數名發生して今後蔓延の兆があるからとの事であつた。

市内の飲食店も當分臨時休業らしい。

此の間、長原と一緒に飲んだビールが當分の飲み納めとなつたのか。

私達は茲しばし、罐詰である。

二號室の「コレラ」患者、二人とも數日の間にすつかり元氣を取り戻して、此の分では菌が陰性になりさへすれば、最早大丈夫だといふ程になつた。

今日はその軍屬の一人に手紙が來たので、病室へ持つて行くと、

「本當にお蔭様で、もうすつかり樂になりました。此處へ擔架で來た時の事は幽に覚えてゐますがまさかコレラだとは思ひませんでした。何しろあの日は馬鹿に暑くて、私が危いから止さうといふのに此奴が大丈夫だと言つてあの漢水で水泳なんかしたのが祟つたんですよ」

と、淋しく笑ひ乍ら傍らの寢臺を指さした。

六月〇〇日

階下の八號室に一人ゐる輜重特務一等兵の朝川に、二度目の輸血をすることになった。

私が此の病棟へ来てから十日程後に「腸チフス」の疑ひで入院して来たのであつたが経過が悪く熱が上つたり下つたりして段々衰弱して行つた。門野軍醫が専任になつてからも軍醫は此の朝川が一番氣にかゝつてゐるらしい様子であつた。

附添ひに来てゐる二人の戦友は勿論のこと、私達も一番に注意してゐるのは此の朝川特務兵であつた。

今日は入院以來二度目の輸血をすることになった。

朝川は「O型」であつた。

「O型」には矢張り「O型」の血液を用ひなければ不可なかつた。前の輸血の時には、附添の兵隊や私達の血液を試験して貰つたが、皆んな「A型」か「B型」であつたので、結局朝川の部隊から健康な兵隊が四五人来て其の中から採つたのであつた。

今日も彼の部隊へ電話で連絡をとると、本隊は目下〇〇の戦線へ出動中であるが残留の者がゐるからとて、しばらく経つと頑丈な特務兵が五人汗を拭き、駆けつけて来た。

直ぐに軍醫が事務室で血液の試験をした。

「オブジェクト、グラス」の上の反應をじつと視つめてゐた軍醫は、

「これはいい。五人ともO型だ。有難い偶然だ。五人もあれば上等だ」

と言つて直ちに注射器で採血にかゝつた。

五人の兵隊は黙つて、代るゝにシャツを脱いだ。

やがて私達は、血液の入つた「アンブル」等を持つて、軍醫の後について朝川の病室へ入つて行つた。彼は入口の方を頭にして仰向に寝てゐた。傍の空いた寢臺に腰を掛けてゐた二人の戦友は、軍醫が入つて行くと立ち上つて敬禮をした。

軍醫は朝川の耳元へ口を寄せて、

「朝川、しつかりしろよ」

と言ふと、彼は裏手の窓の方をぢつと視つめたまゝでしばらく間をおいてから嘎れた聲で、

「はう」

と答へた。

それは入院以來病魔との苦闘に衰へ切つた自分の肉體を、今はたゞ僅かに残つてゐる精神力で、無理に支へてゐるかの様な返事であつた。

頭にも顔にも、そして體の所々にも繻帯がしてあつた。此の數日前から次から次へと腫物が出來て、それが皆んな化膿してゐたのである。まだ廿六歳の若さで、入院して來た時には患者とは思へなかつた位の頑丈な體が、今は病衣の下で胸の骨も浮いて、押し迫つた様な呼吸をしてゐる。

窓硝子から蒼い空と、向ひの病棟の夏の陽を受けて眩しい煉瓦の塀が見える。

軍醫は私の手から血液の入つてゐる「アンブル」を取つて、朝川の顔の傍へ近寄せて、

「朝川、これは何かね、判るか」

と訊いた。

朝川は其の方へ虚ろな視線を向けて、唾を呑み込む様にしてゐたが、やがて引き吊る様な聲で、

「はい、戦友の血であります」

と言つたかと思ふと嘔上げて泣き出した。

涙が幾條も流れては顔の繻帯のところまで止まつた。血を採つた五人の兵隊が、私達の後の方から

肩越しにじつと見てゐた。

軍醫は、

「よし、判るね、元氣を出すんだよ、戦友の血を無駄にしない様に、きつとよくなるんだよ」

と言つて、朝川の左手の袖を捲つて、傍の山本上等兵に上膊部を押へさせ乍ら、肘の關節の内側

を酒精綿で拭いた。

瘡せ、腕に青い靜脈が浮き出て、今日まで何本したか分らぬ注射の跡が、黒い幾つかの染となつ

て残つてゐる。

私は血液の入つた「アンブル」を上の方へ捧げる様にして持つてゐた。

軍醫は「ゴム管」の中の空氣を出して、注意深く脈に注射針を刺した。

皆んなはほつとした様に黙つて顔を見合せた。「アンブル」の中の血液は、コップに注いだ葡萄酒の様な鮮紅色であつた。じつと見てゐると一番上の泡のところか少しづつ靜かに下へ下つて行く。

朝川は眼をつむつてじつとしてゐた。

枯れ様としてゐる朝川の體へ、新しい血がぐんぐんと流れ込んで行くのである。朝川の枕元に今日の晝飯の時、吸飲みに入れてやつた重湯が、殆んど口を付けずにその儘置いてあつた。

私はなるべく朝川の家族の事などは想像しないでゐようと、内心の感傷と闘つてゐた。銃の摺り減つた編上靴が一足、朝川の寢臺の下にぶら下つてゐた。

六月〇〇日

昨日日直であつた高氏上等兵が、今日飯を喰べ乍ら、

「朝川は輸血をしてから幾分元氣がいく様だ」と言つてゐた。

私もさう思ふ。

軍醫も今日、診察がひと通り済んでから事務室で、

「少し取り戻したらしい。併し、決して油断してくれるなよ」と言つて居られた。

此の頃は、軍醫も私達も裸一貫の上へ作業衣を着てやつてゐる。

病室を出て事務室へ入る時などに、石炭酸を噴霧器でかけると、作業衣の下から出てゐる素脚が

少しひり／＼するが、まともな格好では一べんに汗びつしよりになるので此の方が樂である。

夜、久しぶりで雨になる。

私も寢床へ入つてから少し振りで家へ手紙を書いた。

六月〇〇日

朝川がまた悪くなつて来た。

強心剤の注射をしに行くと、附添の戦友から助かるでせうかと訊かれた。

私は今朝軍醫から言はれた事で大體の豫想はついてゐたが、併し何う答へていゝかわからなかつた。

弱く、不調な脈搏が、彼の「戦病死」を豫言してゐるかの様であつた。

夕方、命令が出て私達「門野隊」は明後日朝食後、第二分院へ引き移る事になつた。

これは漢口の郊外西北端へ、軍が新築した、傳染病専門のバラック式病棟であつた。四五日前に部隊から三ツの病棟分隊が移轉して、既に病院を開設してゐたが、向うは目下「赤痢」患者が大多数で、三個分隊では手不足なので、私達の分隊は其の一つの病棟を分擔することになつたのであつた。夜の點呼が済むと私達は事務室の藥物等をぼつ／＼と取り片付けにかゝつた。

六月〇〇日

今日までの此の病棟は、隣の「山内隊病棟」の兵隊が勤務をすることになった。私達は色々な衛生材料等を部隊のトラックに積み込んでから、軍醫や班長の後について各病室をひと廻りして、都合で今日からは他の兵隊がお世話をする事になったが皆んな一日も早くよくなる様にと挨拶をした。

朝川は私達が入つて行くと、すつかり身支度をしてゐる姿を、遠い所でも眺める様にして見てゐたが、例の噎れた引き吊る様な聲で、

「何處へ行くんですか」

と言つた。

軍醫が彼の手を握つて靜かに、

「すぐ戻つて来るからしつかりしてゐるんだよ」

と言ふと彼は力の無い聲で、

「はあ」

と言つたが、出て行く私達の後姿を首を捻ぢ曲げる様にして見送つてゐた。

私が一番後になつて、表に待つてゐる「トラック」に乗らうとすると、後の方から朝川の附添ひの兵隊が一人追ひ馳けて来て、

「衛生兵さん、あの兵隊は大丈夫でせうか、助かるでせうか」

と訊いた。私は其の返事を誰か他の兵隊にして貰ひたかつた。私は事實とは全く正反對の嘘をつくのが心苦しかつたし、さうかと云つて今日まで一生懸命にやつてゐる此の戦友に本當の事は尙更言ひ難くかつた。

私は、もう動き出してゐる車の上から、

「大丈夫、助かります」

と言ひ放つたが、背後から誰かにゴツン／＼と突かれてゐる様な氣がしてならなかつた。

六月〇〇日

私達の新しい病棟は、廊下傳ひに建物の一最後の側で、どの部屋の窓からも、すぐ後の廣い競馬場がひと目に見えるし、競馬場の片隅に小さく見える見物席のスタンドの屋根の上には、時計臺の様な塔が、蒼空を突き上げる様に聳えてゐた。

私達は事務室の隣の部屋へ兩隅に寢臺を並べて皆んな一緒に寝ることにした。そしてその中央の空いた所へ机を置いて食事をする場所にした。それは恰度、内地の兵室と同じ様な格好になつた。木の香も新らしい廣い病室が三つ並んでゐて一つの部屋に〇〇人づつ位ゐる患者が寢臺を並べて寝てゐた。

私達が来るまでは隣の病棟が見てゐてくれたのであつたが、今日からは私達の患者になつたのである。

殆んど全部「赤痢」であつた。

大谷班長が、表から入つて来て直ぐ見える様に事務室の角へ「門野隊」と書いた名札を掲げた。此の第二分院は、本部の病棟と同じ様に、藥室も、炊事部も、入浴場も完備してゐるし、第一、本部の様に支那の刑務所を應用したのとは違ひ、最初から傳染病棟として建てられたものであるから「バラック式」とは言ひ乍ら其の設計は仲々理想的であつた。

私達は、出来ることなら、本部へ置いて來た患者を、この氣持のいい病棟へ連れて來たいと思つた。

七月〇日

表の道路には眼もくらみさうな夏の陽が照りつけて、時々、軍の自動車か煙の様な砂埃を捲き上げ乍ら走り過ぎて行つた。

私は此の間から尻の所へ「あせも」が出来てゐて仲々治らない。

今日も私が事務室で作業衣の尻を捲つて「亞鉛華澱粉」をつけてゐたら、高氏上等兵がそれを見て、

「そんなものを、つけたつて治るかい。すぐ入院して六六でも注射せんと危いぞ」と言つた。

「あゝ、天知る、地知る、我れ知る」である。

私達は、寝てゐて恰度尻が下へ顔を出す様に、寢臺の板に穴を明けておいた。

それは下痢のひどい赤痢患者に使ふためである。

一日に七八回も便意を催す「赤痢」の患者は、その度毎に便所へ通つてゐたり、便器を當てゝゐたりするのでは疲れもするし、間に合はぬ場合も多かつた。そんな患者は此の、穴を明けた寢臺に寝かせて、穴の下へ便器を向はせて置くのが便利であつた。

赤痢特有の血の色をした下痢便が、いま撒いたばかりの石灰の上へ、すぐに溜つてゐた。「マラリア」兼赤痢といふ病名の兵隊もあつた。これは「マラリア」で他の部隊の病院へ入院してゐる裡に、「赤痢」の症状を現はして來たので、此の病棟へ轉入したものであつた。各部屋の窓には細い網戸が張り廻らされてあつて、蠅や蚊を防いでゐたが、それでも夜は矢張り蚊帳を吊らねば眠れなかつた。蠅は見付け次第に蠅たゝきと殺蟲液で退治した。

七月〇〇日

日本赤十字社救護班の看護婦が私達の部隊へ配屬となり、この病棟へも何名かやつて來た。門野隊へ配屬となつたのはその中

丸山きみえ

小杉としえ

鈴木 あい

岩田 うた

原 いく

の五名であつた。

皆んな神奈川県の出身とかで、齒切のいゝ口調で、三十歳迄位のキビ／＼した白衣部隊であつた。彼女達は揃ひの白い制服に、薄い水色のモンペを穿いて仕事をする。ナイトキャップ型の白い帽子の下から少し覗いてゐる黒い髪の毛と、帽子の正面の赤十字のマークとが、「白衣の天使」といふ言葉に、如何にも相應しかつた。

今日から私達は此の看護婦達と、共同で仕事をする事になつた。

彼女達は毎日朝八時に出勤して、午後六時に本部の宿舎へ歸つて行くのであつた。

彼女達は、よく訓練されてゐた。

五人の中で、丸山が一番古参らしく、私達兵隊で言ふと班長といふ様な格式であつた。

皆んな軍醫の言ふ事をよく聞くし、私達ともうまく連絡をとつて、まめ／＼しく立ち働く。

私達はお蔭で、とても助かる事になつた。

漢口の「コレラ」も難民區の支那人に三百名位ゐる犠牲者を出して、どうやら下火になつたらしく、私達の外出禁止令は今日から解かれることになつた。

七月〇〇日

瀨川といふ赤痢の歩兵伍長は、下痢が止まらず日に衰弱が目立つてゐた。

腰の骨が出つ張つてゐて見るからに痛々しかつた。看護婦が綿で圓座を作つて、尻が出る寢臺の穴の周圍へ當てたり、毎日「リゾール」で體を拭いたりしたが、それでも矢張り褥創（床ずれ）が出来た。重湯を少しでも飲むと、すぐその後から下痢をしてしまった。

今朝、私がいつもの様に「葡萄糖」の注射をしに行くと、彼、瀨川伍長は細い手を振り乍ら、「注射ですか、自分にはもう注射の必要はないです。助かる見込のある兵隊にして上げて下さい。自分はどうせ駄目なんですから」

と言つて注射をさせやうとはしなかつた。

それは少しも僻んでゐる風ではなかつた。

私は、

「何を言ふんですか、そんなつまらぬ遠慮は要らんですよ」

と言つて、とに角注射を済ませた。

軍醫は朝から何度も瀨川のゐる病室を出入りしてゐた。それとなく氣を配つてゐるらしい様子であつた。

夕食の時、軍醫は、

「二三日経過を見た上で、或は瀨川に不寢番に付いて貰はねばならぬかも知らん」

と言つた。

夜、十時頃、私達が自分の部屋で蚊帳を吊つてゐると、患者の一人が部屋の入口の所から、

「衛生兵さん、一寸、瀨川伍長が用事ださうです」

と言つた。出口の近くにゐた高氏と、山本とが、

「よし、来た」

と言つて病室の方へ行つたが、しばらく経つと戻つて来て、

「おい、君等どうしよう、瀨川がお世話になつた兵隊さんに、サイダーでも買つて分けて下さいと言つて金を呉れたんだが……」

と言つた。

山本が私に、

「あの患者は、もう諦めてゐるらしいぞ」

と言ふから私も、今日注射をしに行つた時の事を話すると山本は、實は俺が昨日行つた時にもさ

うだつたと言つた。

金は取り敢へず班長に預けたが、私は寢床に入つてから、十二時になつても一時になつても仲々寢付かれなかつた。

何處か向うの病棟でかつんくくと氷を割る音がしてゐた。

八月〇日

今日は三りんぼうらしい。

悪い事が四つあつた。

一、本部の病室から連絡に來た兵隊の話で、輸血をしたあの朝川特務一等兵が昨日の夜明け頃死んだことを知る。

一、瀬川伍長、本日午前八時頃死亡。

一、私達の仲間、高木上等兵、籠抜け盗難にかゝる。

一、滅菌槽から注射器を引き揚げる時、私が過つて床の上へ取り落して注射器を壊はす。

最後の一項は、私が始末書を書いて薬剤部から新らしい注射器を受領して來た事によつて解決は

ついたが、最初の二項は、かねて私達が一番惧れてゐる、所詮取り返へしのつかない私達の悲劇である。

名譽ある「戦病死」の名に於て、靖國の神がまた二柱増えたのであつた。

病棟の裏の暗い野道を、石田上等兵と私とが瀬川の屍體を擔架に載せて火葬場の方へ持つて行くとき、隣の事務室の窓から、衛生兵の誰かど、

「また死なしたナア」

と言つた。私は思はず、

「馬鹿!!」

と呶鳴つた。

高木上等兵の「籠抜け盗難事件」には多少探偵小説的興味がある。

入院患者から、ちり紙、齒ブラシ、片栗粉、時計の修繕等を頼まれた高木は晝飯後に街へ出た。

患者の一人々々の註文を控へた手帳を見乍ら彼は、あちらこちらの商店で買物をして、可なり大きな風呂敷包みが出來たので、

「先生、洋車、要不要」

とうるさく寄つて来る洋車の中から一臺を選んで、その包と一緒に洋車に乗つた。

そしてまだ一つ「角砂糖」を買ふために、或る食料品店の前で車を停めて、包を車に載せたまま、表へ待たせて彼は店の中へ入つた。

其處は江漢路から少し西へ来た、兵隊や支那人がいつでも雑踏してゐる通りであつた。角砂糖を買つて表へ出て見ると、其處に待つてゐる筈の洋車が見えない。

高木は、まさかと思つて其處ら邊りを見廻すが、違ふ洋車がうるさく「先生、洋車、要不要」と集まつて来るばかりで、肝腎の風呂敷包を乗せたのが見當らなかつた。

彼は急いですぐ近くにある憲兵隊へ行つて、事の詳細を届け出て、さうして、

「あゝ今日は馬鹿を見た。ちえツ面白くない」

と言ひ乍ら病棟へ歸つて来たのであつた。

私達は高木から以上の報告を聞いて、彼が怒るのも當然であるし、その洋車の苦力の圖太いやり方に對しては、高木と一緒に腹が立つた。買ひ集めた品物の金額はそんなに大したものではなかつたが、修繕の出来上つた患者の腕時計が二個入つてゐたので、どうも具合が悪かつた。高木は病室へ行つて患者の一人々々に頭末を説明して、若し品物が出て来なかつたら自分が辨償するから、と

に角こゝ二三日待つてくれ、と諒解を求めた。

患者も氣の毒がつて、

「そんな苦力は見付け次第、叩き殺して了はねば駄目ですね」

と口を揃へて言つてゐた。

とに角今日は日が悪い。御神籤をひくと、

「大凶、萬事控へ目なるがよろし」

とでも出て来さうな日である。

八月〇〇日

ゴムの長靴が来た。

今日一日履いたゞけでも、病室と事務室とを何へんも往復するので、足が蒸せる様に暑苦しかつた。併し赤痢病室は是れでないと不可なかつた。

午後、憲兵隊から電話が掛つて、高木上等兵に直ぐ出頭せよとの事であつた。念の爲に大谷班長が同行した。

一時間程経つと、二人はにこ／＼笑ひ乍ら問題の風呂敷包を持つて歸つて來た。
私達が、

「お、有つたか、よかつたなア」

と言ふと高木は、

「うん、有つた。心配かけて濟まん。いま憲兵隊で其の苦力にも會つたが、ぶんなぐるどころかお禮を少しやつて來たよ」

と言ふから皆んなは、

「ふん、そいつあ何ういふわけだ」

と、其の後の報告を聞くと、成る程これは叩き殺したり、ぶん殴つたりする相手ではなかつた。

高木が角砂糖を買ひに其の店へ入つたので、彼の苦力は言はれた通りに店の前で待つてゐると、しばらく経つて高木とよく似た兵隊が出て來たので、苦力の方ではそれを高木だと思ひ込んで其の傍へ洋車を寄せ附けたが、

「先生」は知らぬ顔をして歩き出した。

まだ他に用事があるんだらうと思つて苦力は、洋車を挽き乍ら忠實に其の兵隊の後について歩いて行つた。

て行つた。

ところが、いくら行つても件の兵隊は洋車に乗らうとしなければ、

「先生、先生」

と言つても振り返りもしないので苦力は、これはつきり洋車代の踏倒しだと思ひとろ／＼其の兵隊の前へ廻つて、

「自分は斯んな風呂敷包は要らん、洋車の代金を呉れ」

と切り出したものである。

面喰つたのはその兵隊である。

先刻から五月蠅く洋車がついて來るとは思つてゐたが、こんな出鱈目な、乗りもしない車代を請求される覚えはない。べちやく喋つてゐる支那語の全部は判らないにしても、とに角金を呉れと言つてゐるに違ひない。

日本の兵隊に變な因縁をつけやがつて太い奴だとばかりに、恰度ま近の憲兵隊へ連れて行つたのであつた。

その少し前に高木上等兵からの盜難届を付けてゐた憲兵隊では、茲で事の真相が判然としたわ

けで、直ぐに高木を呼び出し風呂敷包はそのまゝ、高木の手に戻つたといふ次第であつた。
「憲兵隊の控室へ入ると其の苦力がゐて、俺の顔を見るなり、おゝ先生、先生、と言ひ乍ら嬉しさをうにしてゐたよ」

と高木は笑ひ乍ら言つた。

高木上等兵籠拔盗難事件は之で終りである。

午後四時少し過ぎ、小杉看護婦と丸山看護婦が慌だしく事務室へ入つて来て、恰度其處に病床日誌を見てゐた小島伍長と私に、

「あの黒川さん（匿名）が暴れ出して困つてゐるんです、早く来て下さい」と言つた。

黒川といふのは、つい四五日前に赤痢の疑ひで入つて来た〇〇の歩兵一等兵である。入院の翌日から、時々變な事を獨言の様に喋つてゐた。下痢も劇しかつたし、熱は三十九度を上下してゐた。小島伍長と私はゴム長靴を履いて直ぐに病室へ走つて行つた。

黒川は病衣も床の上へ脱ぎ捨て、素裸となつて手足をばた／＼させ乍ら、
「准尉殿、駄目です、駄目です」

と叫んでゐた。私達は今にも寢臺から轉げ落ちさうな彼の手足を押へつけて、「黒川、しつかりしろ、落ちつけ、落ちつけ」と言つたが彼は、

「何をするんだ。准尉殿が危いんです。いま自分が行きます、危いんです」

と大聲で叫び續けて暴れ様とするので、私達二人では手に負へなかつた。他の病室から山本や石田もやつて来て押さへ付けた。寢臺の下へでも落ちたりすると、そこは石灰と大便が散らばつてゐたから始末が悪い。

軍醫が来て、

「これは發作的なもので、もうすぐ靜まるから特別の處置は要らんだらう。たゞ靜かになつてからの脈搏に注意してくれ」

と言ひ残して隣の病室へ入つて行つた。

夕食の時、軍醫が言つた。

「黒川には今夜から不寢番について貰ひたい。君達は疲れてゐる中を御苦勞さんだが一つ頼む」

八月〇〇日

私が不寝番に立つ順番が来て下番の石田巳嶋上等兵が起しに來た。私は「俺の立番中に發作はなかつたよ、その他異常なしだ」といふ石田の申し送りを聞いて、直に蚊帳から出て身支度をした。

私の受持は四時から明け方の六時迄で、不寝番としては最終の時間であつた。

黒川の病室の患者は皆んなすやくと眠つてゐたが、蚊帳を通して見る傳染病患者の寝顔は餘計に瘦せて見えた。

黒川もよく寝てゐた。

私は蚊帳を捲つて入つて、黒川の隣の寢臺の端へ腰を掛けて、じつと彼の寝顔を見てゐた。氣の故いか、晝見た時とは餘計に頬が落ち窪んでゐる様であつた。

窓の外は眞暗であつたが、空には幾筋かの探照燈の蒼白い射線が明滅してゐた。

病棟全體がしーんと静まり返へつてゐて、患者の寢息と、そしてじつと耳を澄ますと、裏の野原の邊りで、ジージーといふ虫の聲がしてゐた。

日中はまだあんなに暑いのに、夜中には最早虫の聲がする。熱を含んだ様な風と、地の底からでも湧き上つて來る様な暑苦しさに、じつとしてゐてさへ汗が出た。漢口の夏も漸く峠を越して、夜だけは最早秋になつたのか知ら。

さう言へば薄いシャツ一枚に作業衣を着た今の私の此の姿では、少し涼し過ぎる様である。私の腕時計が五時十分を指してゐた。

黒川がくくくと動き出した。

そしてばつと眼を開いて私の方を見て、

「准尉殿は何うしました。准尉殿!!」

と段々大きな聲で呼び出した。

私はなるべく興奮をさせない様にと黙つてその儘様子を見てゐると、今度はむつくりと上半身を起して何處かへ立つて行かうとした。

私は思はず、肩先を押へつけて無理に寝かせたが、彼は其の瞬間、死物狂ひの力を出して私の手を押し退けて、

「准尉殿、准尉殿」と叫び乍ら起き上らうとした。

私は黒川の寢臺へ上つて柔道の押へ込みの様にして彼を押へつけてゐた。

黒川は齒を喰ひしぼり、顔から胸へかけて汗を流し乍ら、私に必死の抵抗をして何處かへ出て行かうとする。

「黒川、落ちつけ、何處へ行くんだ、おい黒川」

と私が言つても彼は、

「何だ、貴様は俺を殺すつもりだなア、畜生!!」

と叫び乍ら私の顔へ唾を吐きかけた。

私はそれを作業衣の胸の所へ顔を擦り付けて拭き取つて、一生懸命に押へつけてゐた。

他の患者が眼を覺まして、こつちを見てゐた。

しばらくすると静かになつた。私は手を緩めた。病衣がはだけて胸は荒い呼吸で波打つてゐた。

彼は私の顔を探る様な眼付で視つめてゐたが、低い聲でときれ／＼に、

「いま、准尉殿がそこへ來られたんですが面會に出して下さい」

と言つた。私は、

「あゝさうか、併し今夜はもう遅いから、明日にしたらどうだね」

と言ふと、

×

×

朝の早い病棟の苦力が前の廊下の掃除を始めてゐた。

石田と、山本と私の三人で整頓した寢臺の上で、黒川はきちんと病衣を着て静かに眠つてゐた。

衛生部隊前進

九月になると流石に暑かつた漢口の夏も下り坂になり、陽が落ちると病室の裏でこぼろぎが鳴く様になつた。

そして部隊員の約半数は、交代兵が來て、此の大陸の初秋を後にして内地へ歸還することになつた。

門野隊病棟では、石田與作、山本、廣川そして私の四名が歸還兵の中に入つた。

私が門野軍醫から頼まれて、勤務の餘暇に謄寫版で書いた同軍醫の著「衛生兵に贈る書」も大部

分出來上つてゐた。四六判百頁位の上下二巻に分れてゐる小冊子であつた。

一つには私達への御禮ごゝろとして、いま一つには今度新しく内地からやつて來る衛生兵への貴重な教育資料として、門野軍醫が醫者としての専門的な學識に加へて現地に於ける經驗を織り込

んで上梓されたもので「新らしき衛生兵須知」とも稱すべき書であつた。

歸還兵に乗船の日まで、本部の二階へ集結して合宿することになつた。

愈々明日日本部へ引揚げるといふ日の夕方、私は身の廻りの私物などを整理して、着古した作業衣を皆んなと一緒に事務室の隅の釘にかけた。

胸のポケットの襷に「齋藤上等兵」と墨で書いてあるその作業衣には、今更の様に懐しい消毒薬の臭ひが滲み込んでゐた。

ところどころに點々と赤い染みがついてゐた。

私は残る兵隊の高氏上等兵と二人で裏の競馬場をぶら／＼と歩いた。

茜色の夕焼け雲が競馬場の片隅に聳えてゐる丸い塔の後にたなびいて、涼しい夕風が吹いてゐた。

其の夜兵室で、門野軍醫や班長らが私達四名のために、さゝやかながらいつまでも忘れられぬ想出となるであらう送別の宴を開いてくれた。

軍醫が寢臺の上で「女の純情」や「涯なき泥濘」を唄つた。私達は其の周囲を取り巻いて合唱した。

裏の窓から見える暗い夜空には、赤い灯をつけた何臺かの飛行機が、雷の様な爆音を響かせ乍ら

飛んでゐた。

翌日の朝すつかり用意が出来て本部へ引揚げる前に、私達四名は事務室の横の廊下に整列して、

軍醫と班長に歸還の挨拶をした。

軍醫は低い聲で、

「君達、長い間御苦勞でした。僕の部下としてよく働いてくれたが併し、僕はいつも諸君に無理を言つて君達に損ばかりさせてゐた。

内地へ歸つても體を大切に、時には此の病棟の事も思ひ出して下さい」

といふ様な事を言はれた。心なしか軍醫の眼鏡の奥に涙が光つてゐた様に思はれた。

私は直立不動の視線を、廊下のすつと向うに見える競馬場の柵に注いで、なるべく外の事を考へる様に努めてゐた。

列した。

昭和十四年九月十二日午後二時、私達歸還兵〇〇名は背囊を着け、私物を持つて本部の前庭に整

残る兵隊と將校が、私達の二列横隊の前へこつちを向いて整列してゐた。
藤本隊長が私達に挨拶をされた。

「諸君等といよ／＼お別れであるが、無事に大任を果されてお目出度う。

諸君らは一昨年秋、上海上陸以來勇敢なる衛生部隊員として、中支の山野に轉戦された事は今
次事變史の中に輝かしい一頁を残すことと思ふ。

自分は今春此の部隊に轉屬となつたため、それ以前に於ける諸氏の奮闘振りを親しく見る事が出
來なかつたのは遺憾であるが、前任の小原、佐々木の兩隊長より豫々聞いてゐた事により充分そ
の勳功を知る事が出来る。

内地へ歸り召集解除になつてからも、時節柄充分自重して健康にも注意して頂きたい。

我々はなほ此の地に留まつて交代兵と共に元氣で業務を續行して行くから何卒御安心願ひたい。
永々御苦勞でした。」

續いて岩倉軍曹が私達歸還兵を代表して挨拶をしたがその終りの方で、

「私達がいま内地へ歸るのは所謂凱旋ではありません。

私達はこれから銃後といふ別の戦線へ前進して行くために編成された部隊であります。

私達は内地へ歸りましても現地に於ての緊張を忘れずに新しい職場に最善の努力をいたす覺悟
であります」

と言つた。

藤本隊長の發聲による、

「歸還兵諸君萬歳!!」

の聲を背後に聞き乍ら、私達はトラックに分乗して波止場に向つた。

漢口の街は今日もまた兵隊と支那人、洋車の氾濫であつた。

トラックは其の人混みを左右に分ける様にして走つて行つた。

いつか長原上等兵と一緒に入つてビールを飲んだ店の前に、あの時の姑娘が、黒い支那服の上へ

白いエプロンをして表を見て立つてゐた。

私達が初めて漢口へ入つた時、街の所々の塀などに、まだ書き残されてあつた排日抗日の文字が
今はもう綺麗に白ペンキで塗り替へられて「東亞新秩序建設」「打倒蔣政權」と大きく書き直されて
あつた。

地球は廻つてゐる。

戦争といふ歴史的な颯風の後に、最早建設の杭が打ちたてられやうとしてゐた。

私達は〇〇〇〇の棧橋でトラックを下りて、乗船の命令を待つてゐた。

棧橋一帯は、各兵科の部隊で一ぱいであつた。やゝ西に傾いた太陽が、楊子江の濁流と、棧橋の兵隊を眩しく照らしてゐた。

私達を乗せて内地へ向ふ御用船〇〇丸が、すぐ目の前に黒い船腹を横たへて、數人の船員がロツプを持って甲板の上を往き來してゐた。

隣の棧橋では大勢の苦力が、四角い大きな梱包にした馬糧の乾草を擔いで、

「エーホー、エーホー」

と言ひ乍ら、細い足場を傳つて貨物船に積み込んでゐた。

その向うの方に漢口の時計臺が見えてゐた。

私達は背囊を降して休んでゐた。

見送りの部隊員がトラックでやつて來た。

皆んなお互ひに、

「達者で暮せ、しつかりやれよ」

と言ひ乍ら手を握り合つた。

仲の良かった五六人の戦友が私の傍へ來て、

「家へ着いたらすぐに手紙をくれよ。内地の様子を知らせてくれろよ」

と言つた。

長原上等兵と松川軍曹（現曹長）が、

「記念に一枚撮つてやらう」

と言つてカメラを向けた。

私は傍に立つてゐた米長軍曹と二人並んで、船をバックにして寫して貰つた。

門野軍曹が一人離れて棧橋の中程からこつちを見て居た。

私はもつと何か言はねばならぬ事がある様な氣がしてその傍へ行つた。

併し、「お世話になりました。軍醫殿もお大事に」を何べんも繰返すだけで其の他のことは何にも

言へなかつた。

他の部隊が整列をして乗船にかゝつてゐた。

やがて私達の輸送指揮官、倉知衛生少尉が、

「乗船準備」

と號令をして、私達は背囊を負ひ、私物を持つて棧橋の上へ一列縦隊に並んだ。見送りに來た軍醫や兵隊が私達と、

「元氣で」

「有難う」

「さよなら」

と別れの言葉を交し合ひ乍ら動き出したトラックの上から手を振つてゐた。

トラックが向うの馬繋場の角を曲つて見えなくなると、私は初めて部隊とは全く切り離された様な氣がした。

いつの間にか、時計臺の頂點に傾いた太陽が私達の横顔を照らしてゐた。

お、私はいま不覺にも、肝腎なことを忘れやうとしてゐる。

それは、いまこそ私が身を以て味はつてゐる、生きて祖國へ還らうとする兵隊の感想を、此の日記に書き留めて置くと言ふことであつた。

併し、私のいまのこの氣持は、私が知つてゐる限りの言葉や文章を總動員して見ても、所詮表現

し盡せるものではなかつた。

それは、動員を受けた時、遠く期待の埒外においてゐた生還を、いま實現し得たといふ歡喜でもなければ、想ひ出の大陸を離れて行くといふ感傷でもなかつた。

たゞ、何と言つていゝか判らぬ氣持が、私の體を揺すぶつてゐた。

先きに船に上つて行つた倉知少尉が甲板の上から大聲で、

「藤本部隊、乗船開始」

と言つた。

私達は滑り止めに、古靴下を編上靴の上から被せて、先頭の者から順々に、船腹から下つてゐる段梯子を上つて行つた。

私はふと、私の妹が此の春、十六の若さを急病で逝去したといふ弟からのあの便りが、間違ひない本當の事だらうかと、そんな事を考へ乍ら段梯子の「ロツプ」に掴まつて一足づつ登つて行つた。

(完)

昭和十五年十一月十五日 印刷
昭和十五年十一月二十日 發行

衛生部隊前進

定價壹圓貳十錢

著者 齋藤 駿

發行者 岩野 眞雄

印刷所 日進 舎

印刷代表 長尾 文雄

芝區芝浦二ノ三

東京市芝區芝公園七ノ十

發行所 大東出版社

振替東京一九四七一

電話芝(43)三九四四

大東出版社刊行

陸軍省情報部推薦 百八十版

ノモンハン從軍 樋口紅陽著 實戰寫真四十葉入

ノモンハン實戰記

四六判 四〇〇頁
定價 一圓八十錢
送料 十四錢

全國民渴望の「世紀の戦、ノモンハン事件」の真相は遂に堂々公開された。然も之はホロン
パイル大草原、彈丸雨飛の中に身を以て體驗した酷烈凄絶な大肉彈戰記である。小説のやう
な文體で、ぐんぐん人目を奪つてゆく。これ陸軍情報部長松村大佐が「昭和の肉彈」と推獎
された所以！

後藤朝太郎著

支那の男と女

現代支那
の生活相

百六十版
四六判 三二〇頁
國策版 九十五錢
送料 十錢

支那を識る事に於て本書程、解り易く、奥の奥迄、痒い所に手の届く様に書かれたものは他に見られぬ。
人情、風俗、生活の悉くが、その體臭迄も感ぜられるやうに書かれてゐる。眞に一億大衆の支那讀本で
ある。

大東出版社刊行

陸軍從軍畫家協會推薦

向井潤吉著

繪と文 北支風土記

陸軍美術協會推薦

高井貞二著

繪と文 中支風土記

海軍軍事情報部推薦

吉田謙吉著

繪と文 南支風土記

東京高等商船學校推薦

中村正利著

繪と文 太平洋風土記

柳田國男序 井東憲譯著

支那風俗綺談

四六判三〇〇頁 挿畫五十葉
定價一圓五十錢 送料十四錢

繪と文と相對照して北支那各地の有様が描き出されてゐる。著
者一流の雄勁な筆力大に見るべし。

四六判三二〇頁 挿畫七十五葉
定價一圓五十錢 送料十四錢

揚子江を中心之又廻りつゝ見開しゆく中支各地の様相。次より
次へ映畫を見る如く興深し。

四六判三〇〇頁 挿畫八十五葉
定價一圓八十錢 送料十四錢

南支一體の風物……厦門、海南島、崖縣、海口、廣東等、九十
九所の風景を畫き、更に文よく之を紙上に躍如たらしめ、南支
に在るの想ひあらしめる。

四六判三〇〇頁 寫眞數十葉
定價一圓八十錢 送料十四錢

波荒き太平洋、現下の緊迫せる太平洋は様々に描き出された。
此の潮風に満ちた大洋の空氣を滿喫せよ。

四六判三〇〇頁 一圓五十錢
送料十四錢

茫漠たる支那風俗の中に生れた面白い深刻な實話、傳説、故事
の代表物語り。之を讀んでゐると自然に支那民族の心臓や肺や
胃の腑を掴むことが出来る。

柳田國男序 井東 憲譯著

支那風俗綺談

四六判三〇〇頁
一圓五十錢
送十圓四錢

大東出版社刊行

茫漠たる支那風俗の中に生れた面白い深刻な實話、傳説、故事の代表物語り。飛切り面白い。之を讀んでみると自然に支那民族の心臓や肺や胃の腑を掴むことが出来る。

内容 民間世説、愚かな婿、月容夜話、大頭の甲大人と其父、徐文長の奇行、二人の暢氣者、艶柳記、賢婦人の前身、令嬢の運命、酒保物語、保老の故事、蛇公と蛇婆の故事、虬髯客傳、鶯鶯傳、元無有、謝小娥傳、民情叢談、古今犯罪帳、人力車哀話、娘々船。

吳濟生著 村田孜郎譯

抗戰の首都重慶

四六判三〇〇頁
一圓五十錢
送十圓四錢

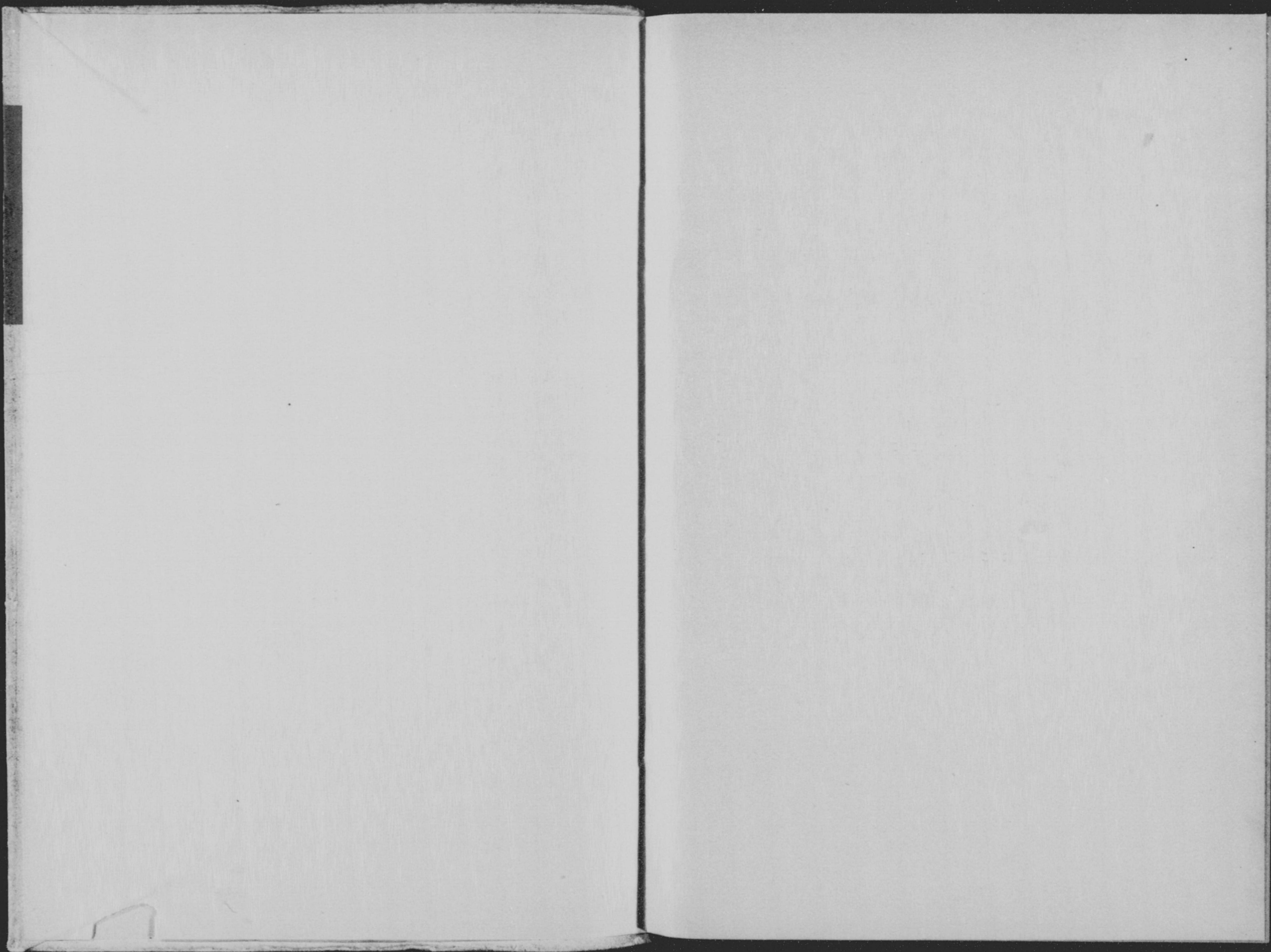
爆撃下の重慶で書かれた唯一精確な重慶全貌記。譯者序の一節……過去二ヶ年我々は常に重慶を目標に戦つて来た。然るにその敵都に關する具體的調査研究、特に抗戰首都となつて形相を一變した重慶に關する資料の皆無な事は誰も一様に痛感してゐる。我が帝都東京の全貌が詳細に重慶側に知られてゐるのに、我々が重慶のメインストリートの名すら知らぬことは遺憾の上もない。

向尙等著 河上純一譯

西南支那踏査記

四六判四四〇頁寫真地圖入
二圓八十錢
送十圓四錢

若き世代の支那青年學徒が國內農村視察團を組織して、廣東、廣西、貴州、雲南、西康、四川の西南六省を踏査した貴重な記録書。各地の人情、風俗、社會動向、經濟、文化等餘すところなし。



大東出版社版

